

# タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2018 成果報告レポート

助成番号 18-3-2

プロジェクト名 ニコゼミ 2019 学びあう・多面的視点の大切さを求めて  
団体名 認定特定非営利活動法人ニコちゃんの会  
所在地 福岡県  
助成額 220万円  
設立年 1992年  
URL <http://www.nicochan.jp/>



## (団体について)

当団体は、「どんなに重い病気や障がいがあっても、その人らしい心豊かな人生を生き抜く」ことができる社会を目指して活動しています。日常と非日常、両面から芸術・研究・啓発・介護（日々の生活のサポート）など多岐にわたる活動を、障がい児の親をはじめとし、医療・デザイン・芸術・教育など幅広い分野の経験と、医療的ケアをはじめとする介護の資格を併せ持つスタッフが企画・運営しています。

## (助成による活動と成果)

今回の取り組みは、多職種連携が叫ばれる昨今において、その前段階として価値観や感覚のすり合わせができる機会になれることや、医療・福祉業界内部の人材の成長もまた重要な課題と捉え、「学び合い」の場を設定し医療・福祉業界内部の人材の相互の成長を促すことを目的に計画したものでした。

お互いの専門性を学び合い、話し合い、コミュニケーションをとる形で進めていく予定でした。新型コロナウイルス感染症が発生してしまったことで、取り組みの重要な部分である、直接的なコミュニケーションをとれる環境をつくれなくなり、困惑しましたが、そのような中で、今できることを最大限に生かす取り組みにしようと、実際に会えない効果は非常に薄れる懸念はあるものの、WEBを活用してZOOMでニコゼミを開催することになりました。

各回のゼミの内容は、①身体の仕組みから始まり、②子ども本来の関わり方、③病院と社会を繋ぐための取り組み、④社会での暮らし方、最後は⑤命についてと、テーマを分けて実施していきました。それぞれの専門分野を持つ「ハナシテ」さんに、話していただき、それについて、わからないことを聞き合ったり話し合ったりするという取り組みになりました。ただやはり、ZOOMで実施したことで流動的な対話が生まれにくく、互いの背景や思い等を十分に知り合うことがないままゼミが進んでしまった部分はありました。その一方で、他県の参加者にもかかわってもらえることができ、他の地域の制度の活かし方等の地域性も学びの要素となったというのはオンラインで開催したことのメリットでありました。また受講生によっては移動や時間等の面でも参加しやすかったという声もありました。終了後の受講生からの意見は、「型にはまった話し合いでない」「いろいろな人の話を聞いて刺激的だった」「いわゆる医療福祉の研修では取り上げられないことを話せる場になりそう」「これまでたくさんさんの研修を受けてきたがこれほど充実した研修は初めてだった」等、医療福祉の分野の研修にある事例検討や医学等の情報のアップデートとは異なる部分を要する学びの場にはなったのではないかと感じています。また最後の振り返りの際に「長く一緒にやってきたので友人がたくさんできました。迷

っても相談できそう」という意見があり、医師、看護師、保育士、介護士等、医療福祉の様々な職種の人がフランクに相談できる場となったことは最大の成果であると実感しています。

今回の企画で、他の職種の様々な価値観や経験を共有することで、チームワークに必要な「感覚」を育むことができるのではないかと思います。今後も何かしらの形で専門職のための「互学」を続けていけたらと思います。

#### （残された課題、新たな課題）

オンラインで実施したことによって司会進行役の指示によって、挙手した人のみ意見を言うこととなり、受講生同士の発言の機会が、対面で想定していたものよりも非常に少なく感じたので「雑談」ができるということの有難さを痛感しています。オンラインで継続開催する際は、適切に「雑談」ができる環境を整えたいと思っています。また、本来予定していた対面でのニコゼミを実施する際にも、そういった余白の部分を十分に考慮した上でより良い形で、開催したいと考えています。

#### （活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

私たちニコちゃんの会のモットーは「どんなに重い病気や障がいがあっても心豊かにその人らしい人生を生き抜く」。心の豊かさを得るには、日常、非日常と両面からの関わりが必要と考え、ニコちゃんの会の活動は行われています。活動の中で、最も重要視してきたことは人と人とのコミュニケーションです。2020年新型コロナウイルス感染症によって、新たなコミュニケーション手段を模索しながらの一年を過ごしたことで、更にコミュニケーションの重要性を感じる一年となりました。

新たなコミュニケーション手段を確立しつつ、安心安全に配慮した直接的なコミュニケーションの模索も必要だと感じています。重い病気や障がいのある子どもたちと家族が、地域で心豊かに暮らしていくためには、多職種の共働、正しい理解をもって関わってくれる人の育成が不可欠だと感じています。更に今後も、多くの人と出会える取り組みや、話し合える環境を作り、コミュニケーションの多様性を広げていくために努力していきたいと思っています。また、このプログラムに参加させていただいたことで、日本中で様々な活動に取り組んでいる方たちとの多くの出会いがありました。この出会いを大切に、お互いの活動を後押しできるような関係性を築いて、誰にとっても、心豊かに人生を生き抜けるよう活動していきたいと思っています。

以上